

精神科看護のやりがい

精神科領域では、医療の対象となる患者さん自身が医療を求めている場合があります。患者さんの希望しない入院治療や投薬など、患者さん自身にとっては不本意な医療を加えられているといえます。

自分自身で医療の必要性を理解できない状況があるが故に、「措置入院」や「医療保護入院」などの本人の同意によらない入院形態が存在します。

一方通行になりがちな医療提供ですが、そんな中で、服薬を拒否される患者さんとかかわり、話を聞き、医療者側からの見解や考えを伝え、コミュニケーションをとっていく過程で、服薬を拒否されていた患者さんが服薬することを受け入れてくれたり、あるいは、入院を拒否されていた患者さんがある時を境に入院を受け入れてくれるという変化が起きたりしたときに、精神科看護師としてのやりがいを感じる人が多いです。

精神科領域では、目に見えて何か「処置」をするという事は少なく、「看護とは何か」と自問自答することがありました。ナイチンゲールの看護論を思い出すと、患者さんの治る力を引き出すために環境を整える、消耗を最小限にする、ということが看護師に求められる大切な役割の一つだということに気が付きます。

また、環境整備とよく言われますが、「環境」とは何を指すのでしょうか。ここで考えなくてはいけないのは、患者さんから見たら看護師も「環境」の一部だということです。もし人的環境が治療に適したものでなかったらどうでしょう。

患者さんの入院治療をよりよいものとするための環境の一部として役割を果たすことが、精神科看護師には求められていると思うのです。具体的に何かをする、というのは明確にはしにくい所です。

何かをする、ということではなく、今「看護師としてそこに存在することが看護である」のではないかと思います。そして、一人ひとり個性のある患者さんのそれぞれにとって、治療を促進する「環境の一部」になること、あるいはそれを実感できることが、精神科看護師の役割であって、やりがいなのではないかと思っています。